

松下幸之助記念志財団 研究助成  
研究報告

(MS Word)

## 【氏名】

前田一歩

## 【所属】(助成決定時)

東京大学大学院人文社会系研究科

## 【研究題目】

近代日本・都市公園の歴史社会学——オープンスペースを形づくる啓蒙・教育・救済——

## 【研究の目的】(400字程度)

近代日本社会において都市公園という空間は、明治期に導入され、大正昭和期の造営技術・設計管理思想・制度的な成熟を経たうえで、戦後期にかけて完成した。そこでは、余暇、福祉、教育、公衆衛生、防災と多様な機能・役割が公園に付与されてきた。遊具の安全性や野宿者（ホームレス）の問題、夜間の治安の問題、設備の老朽化、民間事業者の公園管理への参入など、現在にいたるまで、公園の日常的な管理と利用には、さまざまな葛藤が生じているが、その背景には、この多様な機能同士が競合していることが想定される。社会科学の立場から、公園管理・公園利用上の問題解決に資する公園研究を構想するためには、こんにちの公園に付与された多様な役割が、歴史的にいかんにか形成されたのかについての議論を深めることが不可欠である。すなわち、日本の公園の歴史的特殊性を把握したうえで、公園管理と利用に際して生じる葛藤を理解し、その解決策を議論することが必要である。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

制度的・非制度的に埋め込まれた公園への役割を歴史的に明らかにする際に、本研究では「社会問題史としての都市公園史」を構想することを目指し、以下の2つの方法から公園史研究をおこなってきた。

まずは、「社会問題史としての都市公園史」の視座としての「管理の失敗」に注目する研究の構想である。この視座の土台には、おもに社会学・社会史の分野で展開されてきた、都市空間に存在する既存の秩序が揺らぐシーンに注目することで、人びとが、都市空間に対して与えた意味づけや、その意味の変遷を跡づけようとする研究が存在する。これは既存の秩序が揺らぐ、管理が失敗した瞬間に注目することで、かえって公園に強固に存在する規範やルールを浮き彫りにするための研究方針である。また管理の失敗に注目することは、利用によって生じた問題への対処として、行政が公園の管理方針を変化させる一連の過程を跡づけることでもあり、管理と利用の往還関係を捉えることにもつながる。それでは具体的にどのようなシーンに注目することで既存の公園の失敗を捉えられるのだろうか。

そこで第二に、過去の調査実践を掘り起こし読み解こうとする、社会調査史や計量歴史社会学の研究に連なる方向性を持った研究を実施する。公園は上述の通り、つねに社会問題が表出し、同時に社会問題を解消するための場として利用されてきた。そして近代という時代は、1920年に国勢調査が始まり多くの都市自治体による「社会調査ブーム」が巻き起こるように、社会問題が生じる場所に、数多くの社会調査を実施するようになる時代でもある。本研究では、具体的に、都市公園をめぐる調査史に注目をした。それは、①住居を失った失業者・被災者への調査、そして②児童福祉事業と関連する調査である。①では昭和恐慌期(1930)年代の公園野宿者を扱う調査と空襲罹災者の統計を分析し、②では児童の「不良少年」化を恐れて実施された児童指導の効果測定のために実施された調査を復元・分析した。

## 【結論・考察】(400字程度)

研究の結果、とくに下記の点を明らかにした。まず、第1次大戦後から1930年代にかけて長期化した不況を背景として、都市空間に追い出された「ルンペン」「浮浪者」を対象とする都市自治体による社会調査を分析する。ここでは草間八十雄(1875-1946)を中心にして、東京市社会局によって実施された「浮浪者調査」の内容

を整理・検討した。その結果、1920年代以降、東京では計8回の「浮浪者調査」が実施されており、そのうち1928（昭和3）年の調査では浅草公園、上野公園、芝公園、虎ノ門公園を含む「特定地区」を対象とし、さらに1931（昭和6）年の調査は、浅草公園を中心に実施れたことを明らかにし、「浮浪者調査」において公園が焦点化されていたことを提示した。つづいて1920年代以降の児童公園設置に付随して行われた交通事故統計の整理、および「不良少年」をテーマにした都市自治体の調査を、とくに既刊資料を中心に調査した。それにより、公園事業が児童を対象とすることは、交通事故を未然に防ぐことによる「公園の外の生産性」、そして「未来の生産性」を高めるための手段であったことを明らかにした。